

## 2 小学校における体験的な活動を大切にした指導事例

### (1) 発達段階に応じて自己の有用感を育てていくことを大切にした指導事例

○軽井沢町立軽井沢東部小学校

軽井沢東部小学校では、自己の有用感を育てていくことをキャリア教育の基盤にしています。この基盤の上に、将来の自分の夢や憧れを、発達段階に応じて育てていきたいと考えています。そのために、のびのびとした教育活動を用意し、すべての教育実践の中で、「自主・創造・思いやり」を大切にしながら進めています。低学年・中学年・高学年の発達段階に即したねらいをもって、実践を積み重ねています。

#### 1 発達段階に応じたキャリア教育のねらい

##### <低学年のキャリア教育のねらい>

- ・人間関係の基礎を学習や遊びの中で育成する。
- ・係や当番の役割を理解して、快適な学級での生活を実感させる。
- ・自己の有用感を高めさせる。

##### <中学年のキャリア教育のねらい>

- ・友だちと思いを重ねながら活動することの価値深さを体験させる。
- ・畑などの栽培活動を通して、働くことの喜びを味わわせる。
- ・様々な人に支えられて生活していることを実感させる。
- ・自己の有用感を基盤に、ねばり強く追究する経験を重視する。

##### <高学年のキャリア教育のねらい>

- ・児童会の運営など、学校のリーダーとしての役割と責任を果たす経験をさせる。
- ・身近な職場を見学したり、体験したりすることで、職業観を育成する。
- ・将来の夢や憧れに向かって、自尊感情を基盤に、積極的に自己を高めていこうとする態度を育成する。

#### 2 【低学年のキャリア教育実践】 1年 生活科「新聞紙迷路のある町」

##### 子どもの夢と憧れを大切に

Aさんは、新聞紙を使って思い思いの町を作る授業が始まる前から「私、Bさんと病院をつくるんだ。」と張り切っていた。Aさんのおじさんが、医者になる夢をもっていたという話を聞いて、お医者さんになりたいと憧れをもっていたようだ。

##### 楽しさの中で自己の有用感が育っていく

「OK!」と新聞紙で囲んだスペースに入り口を作ると、Aさんは、両手で丸くサインを出した。「このびょういんは、どなたでも、いいですよ!」と看板に書かれた文字を3人で大きな声で読み上げると、早速男の子が2人やってきてくれた。その後も次々と友だちが病院を訪れてくれた。終末に感想を求めると、「私、やっぱり大きくなったら病院の人になることにしたの。今日ね、いっぱい病院に来てくれて、すごく忙しかったんだ。病院、やってよかったよ。」とAさんは弾んだ声で発表してくれた。



#### 3 【中学年のキャリア教育実践】 3年 総合的な学習の時間「畑で作ろう」

昨年度まで、イノシシやサルが学校の畑に来たことにより、サツマイモなど収穫ができない年があった。見かねた町教育委員会が、菜園を守るフェンスを作ってくれた。このことで、栽培活動にも熱がこもっていった。

3年生は、大根とサツマイモを植えた。「今年はフェンスがあるから大丈夫だと思う。でっかいのがとれそうな気がする。」と夏休み中も水くれにきた子どもたちが口々に期待感を伝えてくれた。草取りをする子どもたちも、サツマイモの葉が茂ってくると益々力が入り、休み時間まで夢中になってがんばっていた。その成果か、今年は、立派なサツマイモや大根が収穫できた。

### 粘り強く追究したことのよさを、実感させる

サツマイモは、焼き芋にすることにした。アルミホイルに包んだサツマイモをHさんは、何度もいとおしそうに手でさすっていた。夏休みにまで草取りに来て、粘り強く栽培に関わっていた子である。葉が伸び、ツルが伸びるたび、畑に向かう回数も増えていった。そのHさんのサツマイモが、焼き芋の落ち葉の灰の中からはなかなか見つからなかった。焼き芋は、どれも似たような形をしている。しかし、Hさんは「私のは違う」といって納得しない。大事にしていたからこそ、意地になる。時間をかけて探し、やっと見つかる「あったー!」と顔をほころばせた。焼き芋をほおぼる子どもたちの顔はどれも満面の笑みであった。

### 支えてくれた人への感謝が、勤労の喜びを更に深いものにする

焼き芋を終えた子どもたちに、フェンスを作ってくれた町教育委員会に手紙を書くことを提案した。全校に募集をすると、3年生からもたくさんの手紙が届いた。お礼の手紙を書く中で、支えてくれた教育委員会の方々への感謝の気持ちや、やり遂げた満足感を、繰り返し思い出していった。

#### 4 【高学年のキャリア教育実践】 6年 S君の実践から

##### S君の良さをいかしたい

S君は、4年生から5年生にかけて学校に足が向きにくくなっていった。自分で考えることは得意だが、胸の中には様々な思いをどう外に向けて伝えたらよいのか迷い、人とのコミュニケーションがうまくとれないところがあった。そのS君が、6年生になってからは、ほぼ毎日登校してくるようになった。教室には、短時間しか入れないが、学校生活を楽しむ余裕も生まれてきた。しかし、どうしても自分の気持ちを察してもらえないと、カッとなってしまい、家に帰ってしまうこともあった。コミュニケーション能力を高めることが急務の課題と考へて、S君の苦手の部分への着目とともに、そのことをS君の良さとしてとらえて自尊感情をあげていくことができないかと考へた。

### 支援組織を活用して、校外へ体験の場を求め

スクールサポーター（臨床心理士）に相談すると、「S君は動物が好きなので、動物との関わりから学ぶ事がある」とのアドバイスをいただいた。そして、動物愛護センター「ハローアニマル」での月2回の職場体験をコーディネートしていただいた。

初めての体験日に、S君は子犬に「お座り」のしつけをするように課題を与えられた。犬舎に入ると早速たくさんの子犬たちがS君に飛びついていった。S君は体をかがめると、それぞれを抱いていく。どうやって「お座り」をさせるのだろうとS君の様子を見てみると、何も押しつけず、ただじっと待っている。そのうち一匹の子犬が「お座り」のポーズをした。すると、ポケットから小さなジャーキー粒を出して一つあげ、頭をなでた。そして、また、じっと待つ。待つことで、子犬の動きを引き出していく。S君のよさがいきる場所がここにはあった。

### 職業体験での自信が将来への夢を育てる

犬との関わりを楽しさと自信が出てきたS君は、「犬のトリマーになりたい」と夢を見つけた。そして、そのためには、どういう高校に行けばよいのかと考へ始めている。「中学に行ったら、教室で勉強する。勉強してトリマーになれる学校に行きたい。」そんな夢を語ってくれるようになってきている。



教 育 委 員 会 の 皆 さん へ  
火 田 に フェ ン ス を 作 っ て く れ て  
あ り が とう ぐ ざ い ま し た 。  
去 年 は サ ツ マ イ モ な ど が イ ノ シ シ と  
サ ル に 食 べ ら れ て し ま い ま し た か  
教 育 委 員 会 の 皆 さん が  
フェ ン ス を 作 っ て く れ た の で お い し  
い や き い も が っ て き ま し た 。  
わ た し は フェ ン ス が あ っ て  
よ か っ た な ん と 思 い な が ら  
や き い も を 食 べ ま し た 。  
本 当 に あ り が とう ぐ ざ い  
ま し た 。  
下 山 大 助



## (2) 職業人の技術や考え方にふれる活動を大切にした指導事例

○松本市立源池小学校

源池小学校では、職業の実際の様子や職業人の考え方に触れ、子どもが、社会の中で自立して生きていくことを大切に、キャリア教育の実践を積み重ねています。

・「源地子ども大学Ⅰ」

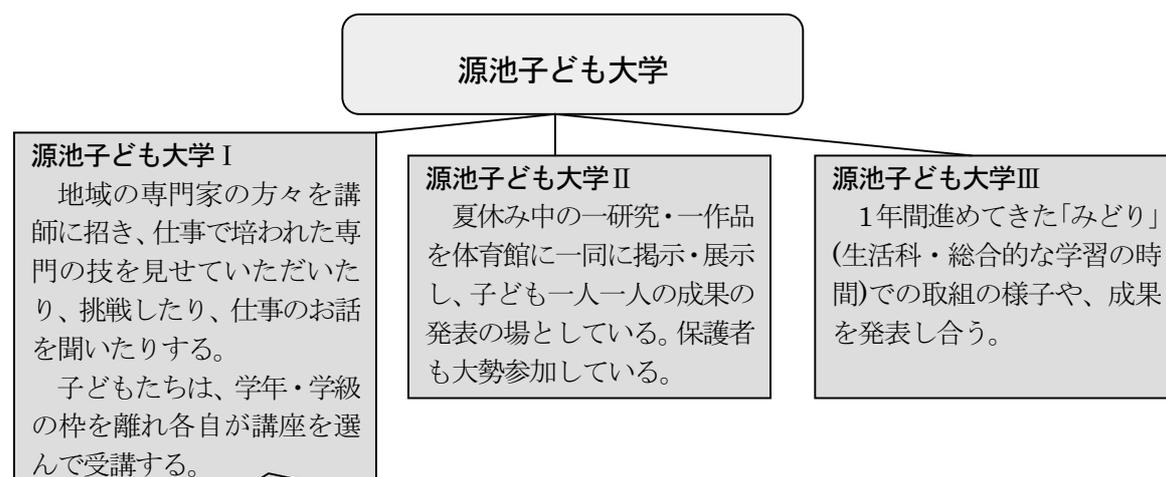
様々な職業に従事されている方との交流、協同体験を通して、その職業の様子を肌で感じ取ったり、働く人の生き方や願いに触れたりして、将来に夢を抱けることをねらい、全校で取り組んでいます。

1、2年生は「昔から伝わる遊びやものづくり」を、3～6年生は「職業体験講座」を行っています。

### 1 源地子ども大学

源池小学校では、子どもたちの学びの場を地域に広げ、専門家の方々の技術に触れて人柄を感じたり、興味あるものを意欲的に追究したりして、「本物に学ぶ」ことでキャリア教育の充実へつなげています。

また、キャリア教育を「子どもたちが社会の中で自立していくために必要な力をはぐくむもの」ととらえ、将来のことを考え、将来の生き方や職業に夢や希望、憧れを抱くこと、様々な職業に取り組む人に関心をもつこと、職業は社会生活を支え、相手と自分に喜びをもたらすことに気付くことを、小学校教育から育てていくことが大切であると考えています。



#### キャリア教育を中核とした「源地子ども大学Ⅰ 職業編・昔の遊び」

##### ◆ねらい

- (1) 地域の方を講師とする講座を通して、教科学習だけでは体験できない学習に接する。
- (2) 様々な職業に就かれた方の優れた技や、生き様に出会うことで、子どもたちの職業(仕事)への関心を高め、職業観を広げる機会とする。
- (3) 地域の方を講師として出迎えたり、地域にある会社や施設に出掛けて学んだり、保護者や地域に参観を呼びかけたりすることで、学び合いの場として学校を開放していく。

##### ◆内容

- (1・2年生) 『地域の方に学ぼう』  
→「昔から伝わる遊びやものづくりに挑戦しよう」
- (3～6年生) 「職業体験講座」・・・子どもたちにアンケートをとり、職業講座を決める。職業体験できる12講座を開講。

講座：大工職人、ケーキ職人、獣医、ピアニスト、サッカー選手、看護師、新聞記者などその職業に携わる専門の方を講師に招いて実施

#### ◆手順

- (1) 係が新しく開く講座や継続する講座を決定。 → 今年度は12講座開講。
- (2) 講座担当職員を決め、講座講師の先生への依頼や交渉を行い、派遣申請を送る。
- (3) 子どもたちにアンケートを実施。
- (4) 人数を調整し、受講児童を決定。
- (5) 講座担当職員と講師で、最終詳細打合せ。
- (6) 外に出る講座や、天候により内容が変わる講座に、必要事項を連絡。
- (7) 家庭用通知を出す。

#### 職業体験講座の実際

##### 《大工講座》

- ・講師・・・地域の大工職人
- ・資材を用意していただき、子どもたちに配布する。
- ・子どもたちは、釘打ちをして、自分の作りたいものを製作していく。
- ・間違えて釘打ちをしてしまったり、何を作ればよいか分からなくなってしまうときは、講師の方に補助やアドバイスをしていただく。 → 大工職人の技能を学ぶ
- ・完成したものを見せ合う。
- ・講師の方に「大工職人になった理由」「大工の仕事の楽しさや苦しさ」「子どもたちに期待すること」などを中心に、お話していただく。 → 大工職人の生き方に学ぶ
- ・講座を通して、子どもたちは、ものづくりの楽しさや無限の可能性を感じながら、大工という仕事や講師の人柄に対して、憧れや希望をもつことができた。
- ・講座の振り返りとともに、お世話になった講座講師の先生へお礼の手紙を書く。

#### お礼の手紙から

##### 《大工講座》

ななめに釘を打ってしまった時に、釘をぬいて直してくれてありがとうございます。間違っても、おこらないで直してくれるのがとてもかっこいいと思います。かなづちの音で、かなりの振動がきたけど、ちゃんと作り上げられたのでよかったです。「仕事の秘訣は何ですか？」って聞いたら、Y先生は、「愛情をもってやればいい。その家を作ってもらう人たちの立場になればいい」って言っていました。私はとてもうれしかったです。

##### 《新聞記者講座》

私が、なぜ新聞記者の講座に入ったかという、新聞記者の仕事は、何回も何回も記事を読み直すのはきつとすごく大変だと思うんだけど、どうしてその仕事に入ったのか知りたかったからです。

でも、今はそのことも分かったような気がします。F先生(新聞記者)はかっこいいです。それは書いている姿です。先生の書き方は、すごく早かったけど、なんだか丁寧に感じました。何で丁寧に感じたかという、先生の書いている顔が、すごく真剣だったからです。

F先生、これからも新聞記者として、お仕事頑張ってください。先生に習ったことを日記に生かして書きます。

源池子ども大学Ⅰは、子どもが、大工職人、ケーキ職人などその職業に携わる人に触れ、職業の内容をより身近に感じるとともに、その人の職業に対する考え方や姿勢によって感性を豊かにし、将来への希望や憧れなどを抱く場となっています。

**(3) 地域の人やもの、自然にふれる体験的な活動を大切にした指導事例**  
**○上田市立浦里小学校**

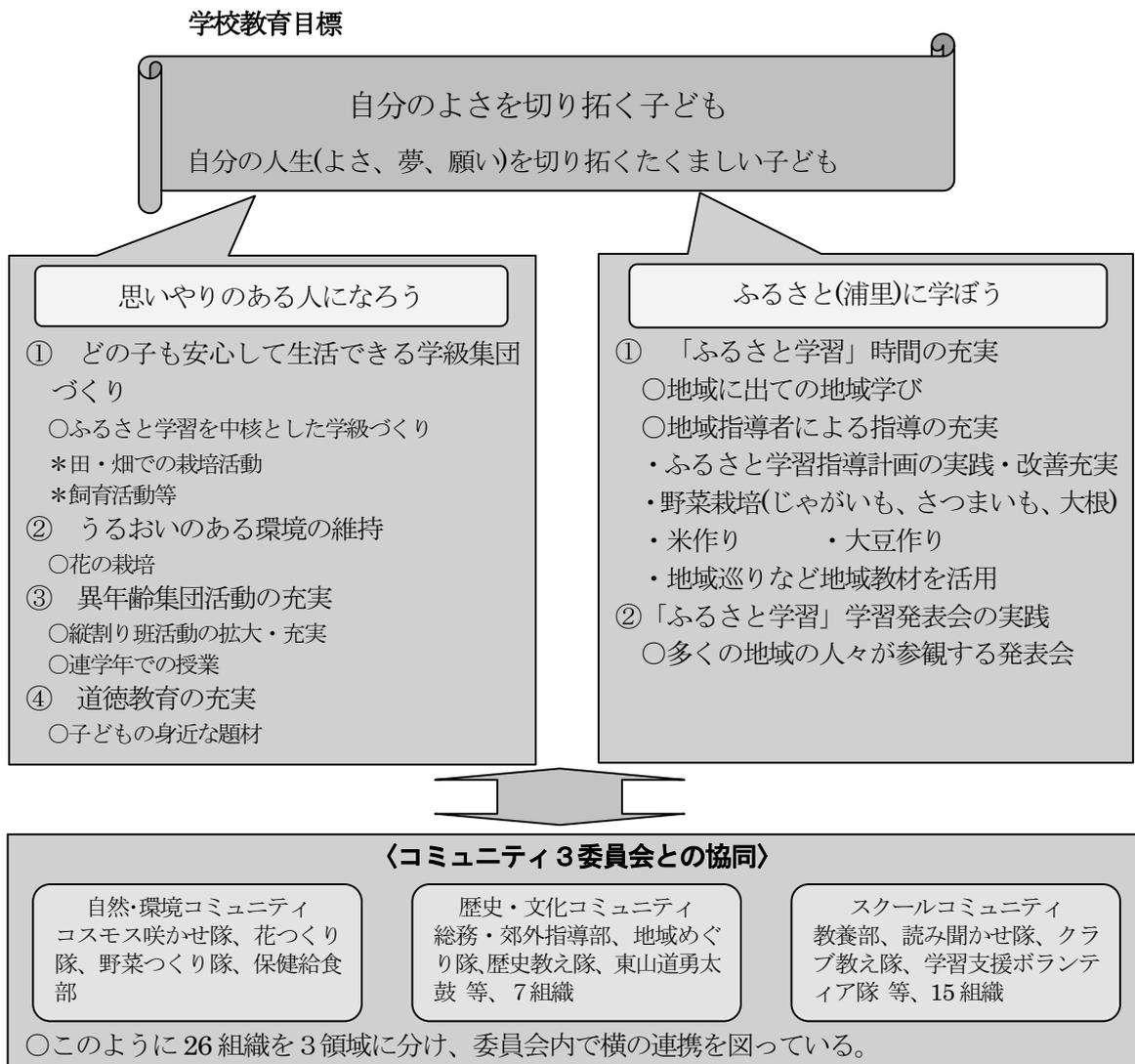
浦里小学校では、浦里の地域の人やもの、自然に触れる学習を通して、発見できた喜び、粘り強く取り組めた誇りなど、自分から関わる中で抱く、自己満足感や自己有用感を大切にしています。また、体験的な活動を振り返り、人やもの、自然と触れる中で、自分が新たに抱いた気付きや思いを大切に以下2つの取組を行っています。

- 「ふるさと学習」 地域の人・ものに触れ、地域のよさや体験活動の素晴らしさを味わう。
- 「クラブ活動」 地域の方を講師に招いた活動を取り入れ、専門的な技や、その人の考え方に触れる。

また、地域と共に歩む学校をめざし、今年、教科学習でも今まで以上に幅広く地域の方の支援を頂く体制作りを進めています。

**1 浦里小学校のグランドデザインにおける「ふるさと学習」**

浦里小学校では、里山や田畑などの豊かな自然環境の中で生活する地域の方々との結び付きを大切に、「自分のよさを切り拓く子ども」の育成を目指しています。浦里の地域から学ぶ「ふるさと学習」という体験的学習を位置付け、たくましく、思いやりのある子どもをはぐくんでいます。



## 2 ふるさとに学ぼう「ふるさと学習」の実践

学校には、広さ 330 坪の田んぼがあります。5 年生が中心となり、米作りをします。米作りでは、代掻きや田植え、除草、稲刈りなどの作業で、地域の方からそのやり方を教えてもらいながら取り組んでいます。支えられて作業ができる喜びや感謝、粘り強く最後までやり遂げられた自信、肌で感じる自然の心地よさを、体験的学習を通してはぐくんでいます。



## 3 クラブ活動（年間 12 時間）

クラブ活動でも、「食から学ぶ」「スポーツから学ぶ」「地域・自然から学ぶ」「遊びから学ぶ」などのクラブを開設し、地域の方から学ぶ体験的学習を取り入れています。

児童のやりたいことを加味しつつ、地域の方に支援をいただいていたクラブ活動を展開しています。

### クラブ活動の実際

「食から学ぶ」クラブでは、自分たちの身近な食材がどのように調理され食べ物になるのか体験するために、ニラせんべい・おやき・そばなど 5 種類の調理実習を地域の方に教えていただきながら行ってきました。「スポーツから学ぶ」では、地元の堪能な方による蹴鞠の体験、太鼓も地元の団体の方を招いての体験と練習、そして PTA 行事での発表を行いました。



他の 2 つのクラブでも、地元にながら全く知ることのなかった名所旧跡を散策したり、普段使うことのないナイフを用いて竹とんぼを作って飛ばしたり、釣りざお作りから始まり、そのさおを使って学校の脇の川での魚釣りをしたり、地域や歴史に密着したクラブ活動を行いました。

〈児童の振り返りから〉

- ・ぼくは、ニラせんべいからそば打ちまでで、一番感じたことは、教えてくださったちいきのみなさんが、ぼくたちのために、材料をもって来てくださったことや、作り方をわかりやすく教えてくださったありがたさです。最後のクラブが、「食から学ぶ」クラブで本当によかったです。
- ・今までいろいろなものを作ってきたけれど、どれもぜんぶおいしく作れて、食べられたと思います。中でもそば打ちは、初めてでおもしろかったです。そばを切るのやのばすことができてうれしかったです。料理がおいしく作れたのは、お助け隊のみなさんのおかげだと思います。最後までしっかりできて、おもしろかったです。

〈地域の方（講師）の感想から〉

- ・自分の子どもの学年だけでなく、いろいろな学年の子どもたちと交流できてよかった。
- ・手入れの活動を通じて、子どもたちの交流が積極的なふれあいになってよい。子どもたちの元気な挨拶に、心が洗われた。
- ・学校の行事などを通して、子どもたちを身近に感じ、親しみがわいてとてもよかった。

「ふるさと学習」、クラブ活動は、子どもが、地域の人や自然と触れる体験的学習によって、地域社会との結び付き、支え合いのよさに気付くことができ、浦里の地で生きることへの愛着や誇りにつながっています。

#### (4) 栽培活動の振り返りで、話し合いの指導ポイントを大切に実践した指導事例

○長和町立和田小学校

和田小学校では、キャリア教育の一環として栽培活動を行い、働くことの喜びや大切さを学んでいます。2学年では、地域の方とじゃがいもをつくる活動を通して、育てる苦労や収穫の喜びを体験しました。体験的な活動の振り返りの際は、以下のような話し合いの指導ポイントを大切に実践しました。(事例の中に印をつけてあります)。

- ・子どもの発言をもとに、次へ発展させる発問を考え(用意し)展開していく。(網掛け)
- ・体験をしての子どもをつぶやき・感想の中から、新たな感動・気づきを認めお互いに共有していく。(下線)
- ・低学年の子どもは経験をもとに話すことがあるので、既有経験と比べながら語らせる。(太字)

#### 1 学年 2学年

#### 2 題材名 じゃがいもを育てよう (9時間)

本題材では、農業ボランティアの方に支援していただき、1・2・4年のなかよし班(縦割りグループ)でじゃがいもの栽培をしています。収穫をしたじゃがいもは、学級で料理を作ったり、学校給食の食材にしたりして使われます。

#### 3 授業の流れ

##### 1-① じゃがいもを植え付けよう!

(2時間)

- (1) あいさつ
- (2) 農業ボランティアの方のお話(じゃがいもの植え方を含めて)  
「芽を上にして、尺棒の間隔で種いもを置く→少し土をかける  
→植え付けたら、芽が少し出るくらい土をかける・・・」
- (3) なかよし班で、じゃがいもの植え付けの作業(約30分)
- (4) 農業ボランティアの方のお話



「・・・大勢でやるので短い時間でできました。この後、肥料、土寄せ、草取りなどの作業があります。夏休みが終わった頃にじゃがいも掘りをしましょう。土を掘るといもがころころと出てきます。焼きいもをしたり、給食で料理したりします。楽しみです。野菜などを作ることは、おもしろい仕事です。都会に住んでいるとこのようなことはできません。長和町ではできます。できるだけこのようなことをしてもらいたいです。お家のお手伝いもしてもらいたいです。農業の仕事を勉強することもためになります。みなさん、頑張りましょう。」

- (5) 感想・お礼のあいさつ

##### 1-② 教室に帰っての事後指導

T: じゃがいもの植え付けをしてみてどうだったかな。

C: いもを植えるのが少し難しかったけれど、楽しかった。

C: うまく植えられてよかった。こんなに早くできるとは思わなかった。

C: 小さな種いもから、たくさんの大きなじゃがいもになるんだなと思いました。

C: 間をあけてじゃがいもを植えるんだなと思いました。

C: 自分の家のやり方と違っていた。家では、芽が出ていない種いもを植えていた。

T: いい意見をたくさん出してくれたね。また、作業のときには、みんな一生懸命協力し合っ  
て植えていたね。この後、どんな作業があるかな。

C: じゃがいも掘り。じゃがいもの収穫。

T: **みんなは、学級園で野菜を育てているよね。苗を植えた後、どんな世話をしているかな。**

C: 水くれ。肥料をやったよ。草取り。・・・



T：じゃがいもの植え付けの後どうする？

C：世話したい。みんなで植えたから、水をくれたり、肥料をやったりしたい。・・・

T：みんなの考えがわかりました。農業ボランティアの方は、植え付けの後、肥料、土寄せ、草取りがあるといっていましたね。やり方を教えていただいて世話をしていきましょう。

2 追肥、土寄せをしよう！

(2時間)

○追肥、土寄せの仕方を農業ボランティアの方に教えてもらいながらやりました。

- ・追肥は、出た芽の周りにパラパラと粒の肥料をまきます。肥料が多すぎると枯れたり、少ないとよく育たなかったりすることを学び、子どもたちは量に気を付けて追肥をしていました。
- ・土寄せは、太陽の熱や病気から土の中のじゃがいもを守るのに必要であることを学び、子どもたちはじゃがいもの芽を傷つけないように、慎重に作業をしていました。



○子どもの感想

- ・鍬を使って土を寄せるとき、葉っぱに土をかけないようにするのが難しかった。
- ・はじめてやって難しかったけど、楽しかった。



3 じゃがいもを収穫しよう！

(2時間)

4 収穫したじゃがいもで料理を作ろう！

(2時間)

5 お世話になった農業ボランティアの方にお礼の手紙を出そう！

(1時間)

お礼の手紙

のうぎょうボランティアのみなさん、5月から11月までお世話になりました。6月10日のひりよと土寄せのときに、わかりやすく教えていただいたので、2年生のみんながうまくできました。じゃがいもを、2年生の教室でふかしてたべたら、すごくおいしかったです。今年の1年間ののうぎょうを教えていただき、本当にありがとうございました。

4 本題材を終えて

- ・今までじゃがいも栽培への子どもの関わりは、植え付けと収穫の作業だけであった。植え付けをした後、じゃがいもの世話と学級園で育てている他の野菜の世話とを比較して話し合うことで、じゃがいも栽培へ自分から関わって育てていこうという気持ちが出てきて、追肥・土寄せの作業につながった。
- ・気候の変化による収穫量の違いや少雨による収穫時の土の硬さ（雨が降らないと土が硬くなり、掘るのが大変だ）などから、作物を育てる大変さがわかってきた。
- ・実際にやって、見て、触って、「種いもがぺちゃんこになっていた」「1個の種いもから8個のいもがとれた」など、じゃがいもについて、より知識を深めることができた。
- ・1、2、4年の3つの学年で作業をやり、短い時間で作業を終わらせることができたことから、仕事を協力してやることの大切さを学んだ。
- ・収穫したじゃがいもを使って学級で料理を作ったり、給食で食べたりなど、収穫した物をみんなで分かち合う喜びを味わうことができた。
- ・キャリア体験として栽培活動に携わり、働くことの喜びや大切さを学ぶとともに「畑の先生」との交流を深めることができた。

**(5) 働く人との出会いから「働くこと」「なりたい自分」について考えることを大切に  
にした指導事例**

○飯田市立丸山小学校

丸山小学校では、「働く人との出会いを通して自分を見つめよう（6年）」の単元で、子どもたちが自分を見つめ直したり、色々な仕事に携わる身近な人々の生き方や考え方、仕事に対する思いに触れたりすることを通して「なりたい自分」についての考えを深めさせ、今、自分にできることを実践しようとする意欲を高めたいと願いました。本事例は、1年を大きく3つのステージ（段階）に分けて学習する中で、夏休み中のステージ②の段階において行った「一日職場見学・職場体験」から、子どもたちが「働くこと」と「なりたい自分」についての考えを深めていった事例です。

**1 単元名**

「働く人との出会いを通して自分を見つめよう」（1日職場見学・職場体験 6年生）

**2 めざす子どもの姿**

- (1) 自分の目標や夢「なりたい自分」について真剣に考え、それに向けての今の自分の在り方を見つめることができる子どもたち。
- (2) 今、自分にできることを実践しようとする意欲を高め、中学校生活への希望を持つことができる子どもたち。

**3 指導の具体的な手立て**

- (1) 体験的な学習（夏休み中の職場見学・職場体験）を通し、働く人との出会いの場を設定し、働く人の思いを感じ、「なりたい自分」をイメージする手がかりを得る。（体験的な学習）
- (2) 自分の体験をまとめ、発表会を行い、出会った人の仕事に対する考え方の共通点や相違点など話し合う中で、視点を明確にして自分の考えをまとめる。（自己検討活動）
- (3) 人生年表を作成し、「なりたい自分」を実現させるために、今自分ができ、将来自分ができ、希望を持って中学校へ進めるようにする。（将来設計能力・小中連携）

**4 単元について**

**ステージ①**

- 最高学年となった自分自身を今までの自分と比較して見つめた。
- 自分の成長や、現在の姿、これからの自分を考え、自己理解を深めた。
- これから「なりたい自分」を考え、今自分にできることを実践していく意欲をもった。

**ステージ②**

- 実際に働いている方（お家の方）の話聞き、職場見学や働く体験をすることを通して、職業内容や働く人の思いを感じ、「なりたい自分」をイメージする手がかりを得られるようにした。
- 職場見学、体験や聞いた話から考えたことをまとめ発表する。その中で、出会った人の仕事に対する考えや思いの共通点や相違点、心に残ったこと等を話し合う中で、今までの学習を振り返り、「なりたい自分になる」ためには、今の自分の在り方が大切であることに気づいた。

**ステージ③**

- 自分の人生年表を作成させ、「10年後の自分」を想定した。
- 「なりたい自分」を実現させるために今自分ができ、将来自分ができ、希望をもった。

## 5 実践事例

### (1) 他者・友と関わりながら、自己の生き方を見つめ直すことができた子どもたち

#### —友とのかかわりの中で、今までの自分の経験と結びつけ自分の生き方を再認識したA生—

A生は、職場体験後のグループの話し合いで、どの職業でも共通して大切にしていることに、「あいさつ」、「正確に物ごとを行う。」とカードに書いた。さらに仕事をしてやりがいを感じる時の共通点として「喜んでもらった時」と付け加えた。その後、A生は、クラスの話し合いで、全体の意見を聞いて、「責任感」「相手の気持ちを考える。」「約束を守る。」と書いた。

A生は、日々の生活の中で家族からも学校の先生からも、更に社会体育の関係者からも進んであいさつをするように言われていて、自分の意識の中に自然とあいさつの重要性がすりこまれていたのではないだろうか。教師はとらえた。職場体験を通して、あいさつは様々な人とコミュニケーションを図る上で何よりも重要であること、社会で生きる他者（お家の人の職場の方々）と今までの自分の経験を結びつけて自己の生き方を再認識し、更には自分の考えや生き方を確かに行うことができたのではないか。

**体験を通し、働く親や身近な人の姿から感じたことを友と関わりながらまとめていったことで、子どもたちは自己の生き方を見つめ直すことができた。**

### (2) 夏休みの体験をもとに、視点を明確にして振り返らせたことで、その後の活動に目標をもって取り組み、自己肯定感・勤労観を高めていった子どもたち

#### —一人と関わるのが少なかったB生の変化—

自分の体験をもとにして、「その仕事の大変さを感じる時」「その仕事のやりがいを感じる時」「その仕事をするうえで大切にしていること」の3つに視点を当てて振り返らせ、それをもとにみんなの考えの共通点について考える場を設けた。普段はなかなか話し合いの中で自分から意見を言うことや友達と関わっていくことが少ないB生も、話し合いに参加をし、次のように意見をまとめた。

- 仕事の大変さを感じる時・・・お客様に仕事の内容を理解してもらう時
- その仕事のやりがいを感じる時・・・お客様から「ありがとう」の言葉をいただく時
- その仕事をするうえで大切にしていること・・・まちがえないようにすること
- 感想・・・私は大人になったら人のためになる仕事をして、責任感をもってやりたい
- どの職業でも共通していること（グループで話し合って）・・・相手の気持ちを考える。約束を守ってあいさつを必ずする。責任をもって取り組む（後略）

また、この授業での話し合いをもとに、児童会祭りでの目標を決めて、ペアの1年生にも自分から積極的に関わって活動に取り組むことができた。



児童会祭りを終えての感想でも、「ペアの子と（自分から）仲良くなれたこと」、「1年生からお礼のお手紙と朝顔の種をもらえたこと」を記し、とても喜んでいる姿があった。自分たちのやったことが、1年生にも喜んでもらったことで満足感を持ち、仕事の大変さや大切にしていることだけでなく、自分たちがしたことによって相手に喜んでもらったという、仕事のやりがいを感じる事ができた。人の役に立つ喜び→勤労観や自分のよさに気づく→自己肯定感の高まりを感じる事ができた。

**書く視点を明確にして自己の考えを書かせ話し合ったことは、その後の活動に目標を持たせる有効な手立てとなった。そして、1年生との関わり（他者との関わり）の場の設定と、1年生からの手紙（他者評価）によって自己肯定感・勤労観を高めていくことができた。**

**(3) 自己の体験を掘り起こし、葛藤のある話し合いを仕組むことで学び合いが成立し、考えを深めていった子どもたち**

—正直な自分の気持ちを出し合い、自分を見つめ、将来に向けて考えていったC生、D生—

「仕事をする上で大切にしていること」の共通点についての話し合いの中で「あいさつを大切にしている」ことが挙げられた。「自分からあいさつができた人？」という教師側からの問いかけに、多くの児童が自分からあいさつできたと挙手する中、親の職場のホテルに体験に行き、接客業であいさつをする機会が多かったと思われるC生は、「はずかしくて、言われてからじゃないと言えなかった」と語った。また、知り合いのパン屋さんに行った、普段からあいさつがもう少しできるといいなあと思っているD生は、「パンを買いにきたお客さんに、はずかしくてごまかした」と自分の気持ちを語り、自分を見つめ返していった。



その後C生は「働く時に心がけたいこと」として下記のようにまとめた。

カード記入項目	C生の記入した文
働くときに自分が心がけたいこと	あいさつ
その理由	あいさつは、相手のこともあたたかい気持ちにさせるし、自分もあいさつをすると、1日ががんばるぞ！とかやる気が出て気持ちがいいので、働くようになったら、はずかしくても、あいさつはしたいです。



またD生も、下記のように記した。

どんな職業でも大切にしていることや、やりがいを感じる時は一緒だと分かった。また、自分が大人になって仕事を始めた時に心がけたいことは、「約束を守る」、「相手の気持ちを考える」、「あいさつをする」など、今からできることがいろいろあるので頑張りたい。

このように、「将来に向けて今からできることとしてがんばっていきたい」という意欲をもつことができた。

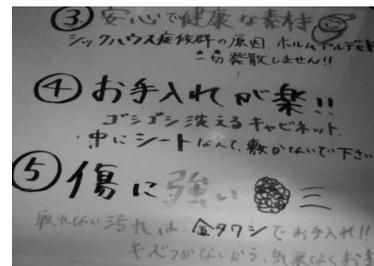
**体験を十分掘り起こしながら葛藤する場面を作り出したことで、自分を見つめ直し、考えをより深め、将来に向けて取り組む目標をもつことができた。**

**(4) 親の働く姿から、社会で働いている親への尊敬や感謝の気持ちをもてた子どもたち**

—両親の働く姿を見たり、体験したりして、尊敬や憧れ・感謝の気持ちをもったE生、F生—

感想お父さんの会社の仕組みや仕事の大変さを知ることができました。ホーロー製のキッチンなどのすばらしい商品を売っているお父さんをぼくはぼくこりて思いました。

E生は親の職場で売っている商品のすばらしさを実感し、そんな商品をお客様に丁寧に説明をしながら売っている父親の姿に誇りを感じることができた。



感想  
 お父さんは、魚をさばいたり、味つけをしたり、お母さんはもりつけ、せきやく、しじみ、食欠み不手など  
 とっても大変なのに、わたしたちのことも、世話をしてくれてうれしかった。  
 わたしもお父さんお母さんみたいにになりたいです。

F生は両親が経営をしている飲食店に行き、両親の働いている姿を見るだけでなく、自分も実際に経験をすることで、上手くできない自分と比べ、仕事の大変さを実感するとともに、両親への尊敬の気持ちをもつことができた。さらに、そんな仕事をしながらも両親は自分たちの世話をしてくれているという思いに至り、両親への感謝の気持ちをもつことができた。

◆F生の作文（キャリア教育作文コンクールにて最優秀賞を受賞）

（前略）父の手伝いをしました。その手伝いとは、盛りつけをしたりおにぎりをつくったりといろいろやりました。父が見本を見せてくれた後に私がやりました。けれど、父のようにには上手にいかず、少し形が下手だったので、父にコツを教えてもらいやってみました。すると、さっきのものよりも上手にできました。「父はこのようにして、上手になっていったのだ」と思いました。



たまに私はお店にいるけれど、そこでも父と母の仕事は大変だと思いました。お客様が入ってきたら、何をやってもそれをやめて、「いらっしゃいませ」と言っていました。その後につくった料理を運ぶ時も、「失礼します」と言って、机の上に置いていました。食べ終わったお皿を片付ける時も「失礼します」と言って、お皿を片付けます。（後略）

小学校でのキャリア教育で、身近な大人の生き様に触れる機会を設定する時、子どもたちの一番身近な大人といえばやはり両親や祖父母である。昨年は家庭の中での仕事を1週間体験する中で、子どもたちは毎日の親の仕事の大変さを実感することができた。今年度は、社会の中での身近な人（両親や知人）の働く姿を見て、両親への尊敬や憧れ・感謝の気持ちをもつことができた。

2年間の学習を通して、子どもたちは、大変だけれどやりがいをもって働いている家の人に感謝の気持ちをもつとともに、家庭での自分の役割を果たそうとする気持ちをもつことができた。

**小学校でのキャリア教育では身近な大人である親の協力が重要である。小学校の時に親の職場の様子を見学・体験することは、中学校でのキャリア教育にもつながっていくと考える。**

6 研究から明らかになったこと

- (1) 体験を通して社会で働く親や身近な人の姿から感じたことを、友と関わりながらまとめていくことは、自己の生き方を見つめ直すことにつながる。
- (2) 夏休みの体験をもとにして、書く視点を明確にして自己の考えを書かせたことは、その後の生活に目標をもって取り組み、自己肯定感・勤労観を高めていくことにつながる。
- (3) 自己の体験を掘り起こし、葛藤のある話し合いを仕組むことは、学び合いが成立し、勤労観を育て、考えが深まることにつながる。
- (4) 親の協力が小学校でのキャリア教育では重要である。また、小学校でどんな職業を経験しても中学校でのキャリア教育につながる。